

原始佛教々團に於ける

平等思想と其歸結

結 城 瑞 光

一、古代印度の階級制度

印度は古代から絢爛な精神文化の叢苑として幾多の宗教、哲學、文學を産んでゐる、彼の神秘的な天啓文學である吠陀や、深義を藏める奧義書、高雅を誇る大敘事詩、扱は千古不滅の人格に幽遠限りなき救世の教義を説ける佛教等々枚擧に遑ない程夥しい産物である。然し其等は文化史の立場から讚美も感歎も惜まないが、其の恩寵を蒙る住民が不合理な階級制度に怨詛の聲を放つてゐるのは見脱せない事實である。

アリヤン民族浸入以來先住民を征服した其の自負と被征服者を輕視する觀念とが、リグ・ベーターの完成末期頃固定した差別の制度を造るに至つた、彼等の信仰した宇宙創造の神は其の身体から四姓

(Catur varṅga) をも分出したと確信したのである。(P.V.Purusa sukta) 所謂 Brahman (婆羅門族) 僧族) Ksatriya (武士族) Vaisya (農工商族=平民) の再生族と Sudra (賤民) の一生族の四姓で婆羅門は最高位、以下順次に低く賤民の如きは後世に至つて Gautama dharma sutra XII には吠陀の聲を聞くことさへ禁じてゐる、然し時代の進展は此の婆羅門至上の階級差別に慊らず梵書の時代から奥義書の時代になるに従つて武士族の自由思索や、教權打破の叫びが次第に差別を名目的にならしめた、殊に奥義書の終期になれば其の本体と現象との關係に於いて現象界の存在は本体を知らざる無明より起る故に本体の梵に歸せば一切差別なき一如の境涯であると主張した事や、一般社會の階級制度に對する不平の勃發に最高權威を誇る婆羅門族は自姓保護と社會制度の秩序のために三種の經書を編纂して之が抗禦を策した、就中法經には四姓の義務及び社會的法規を嚴重に定め反動的に其の差別を力説するに至つた。

但し或る程度の變姓は認めてゐた (Vasīṣṭha dharma sastra Vol 3 or Gautam. D. S. IV. 22) 尙再生族と雖も奴隸となることがある。雜寶藏經卷四、又一生族でも自由民であるといふ。W. Hopkins 教授の Cambridge History of India ch XI P. 268 等參照。

是の如く復活的防禦的に陣容を建直した婆羅門族の策略に下三姓は習慣上の階級差別思想が手傳つて

實際の平等の世界に進出を沮まれて仕舞つた、奥義書にしても自由平等を論じて居ながら又反對に現象界の存在を欲とその結果に成る業に依ると説くために差別をも認めねばならぬ自己矛盾に陥つた一元論的二元論をも説いて居る。其の他何れの宗教哲學を見ても悉く吠陀思想の敷演ならざるはない有様であるから歸する所は婆羅門至上主義になるのである。要するに平等の世界は理想であり問題外ならざるを得ない事實は奈何ともすることが出来ないのである。

當時の人々が衷心から熾烈に自由解放を望んだことは當然であると肯かれる、佛陀の出現は實に斯る時であつた、佛教は果して絶對の平等を實現したであらうか。余は原始聖典殊に阿含部經典に現はれた事實に由つて原始僧伽の平等思想の實際に就て簡單に述べやう。

二、佛陀の平等思想と僧伽

佛陀は其の人生觀に於て凡ての苦惱は（差別觀も）個体的生活意志の肯定に依つて生じたもの故個人的小我と偏狹的宇宙我を否定した絶對無我の境に入れば寂靜として何者にも動かされぬ妙樂處に到ることを教へた、換言すれば人間の苦惱は其の意志の根本に於て盲目的活動（無明）があつて、それが生命の特質（欲）をなし、其の發現が仮象を生じて現生苦を受けるのである、即ち無始無終の輪廻

の苦惱は認識した因縁と不認識の業とが集合して次生の苦を受くるのである、又世界觀に於ても吾人の認識に依つて世界は意義がある故、其の認識が其れ自体に於いて無明である以上當然苦の世界でなければならぬ、佛陀の苦心した所は如何にすれば此の苦を離脱するかにあつたのである、佛陀の有ゆる教義の目的は離苦の手段に外ならない、最後に於て佛陀は現實を超越して苦業の繫縛なき所謂有漏身を滅して清淨なる解脱涅槃 Moksa Nirvana に入り絶對自由無我の大道に没入する所にある。即ち再び生を受くることのない常住不滅の法に歸するのである。佛陀は「四諦の法を見れば欲は除かれ再び生を受くる事なき云云」と言へるが如く涅槃の境に入るものは再び現實の苦惱を経験しないのである。斯く言へば頗る消極的な無活動の状態になるやうに思ふが、實は煩累のない精神的自由の世界に法の國を建設されることになるのである。此の國土の住民には何等階級的の桎梏もなく悉くが平等の法悦に潤ふのである。即ち國境もなく人種もなく況んや後天的の階級差別の如きものは認むべくもないのである。當時の民衆が糾卒として佛陀の慈光に浴さんとしたのは至當であると思ふ。此の平等海とは實に僧伽 Sangha なのである。僧伽とは同行者の集團（和合僧團）といふ意味で其の團体は教主、教法、教徒の三者から成立するものであるが佛教が創始ではなく古く婆羅門の教師（Acarya）と弟子（Antevasin）と神の啓示（Srutii）の關係に於ても見る所である、佛教は寧ろ之を襲用したも

のである、此外佛教に於ける修行の徳目などは從來の他派のものを隨宜轉用したものが多く、然し外形は似ても内容に至つては頗る相違がある、僧團の成立は佛陀鹿苑に於ける初轉法輪 (Dharma cak-
ra pravrttans) に於て五比丘の歸依に始まる。即ち茲に於て三寶は具足したのである。即ち佛阿羅漢が佛寶で、四諦等の教義が法寶、五阿羅漢が僧寶である、而して三寶といふ教會成立の三要素の上からは佛陀世尊は佛法として別にするが僧伽といふ團體生活の場合は佛陀も羅漢の一人であるから僧伽以外の方ではない。

衆人にして一度此の教團に加入するものがあれば教團は其の種姓や職業の何たるかを問はず悉く釋子 (Sakyaputriya) となつて平和と希望と努力に充滿した生活をするのである、雜阿含四十二「如天大雨水流隨下、瞿曇法律亦復如是、比丘比丘尼……若男若女悉皆隨流向於涅槃、浚輸涅槃」(辰四)とある如く佛陀の教へに隨ふ在家出家は共に涅槃に入ること恰も洹河、耶牟那河等の諸流が大海に入つて同一鹹味となるが如しとの謂である、即ち教團では人格の價値は佛陀の教化に浴するか否とに依つて定まるものであるとした。故に教化に浴するものは人格價値に於て平等の地平に立つのである、但し必ず教團に入ること前提として居る、入團せざる限り現世の差別は佛陀も之を認められて居た、猶阿含經典の諸所に種姓問題を論議して佛陀の教團に屬したものが澤山居る。

1' V.T.Mahavagga XI.29 D.N.Mahaparibbana (PII5)

11' A.N.V.99.or VI.135. 長阿典尊經 (昃九、二六)

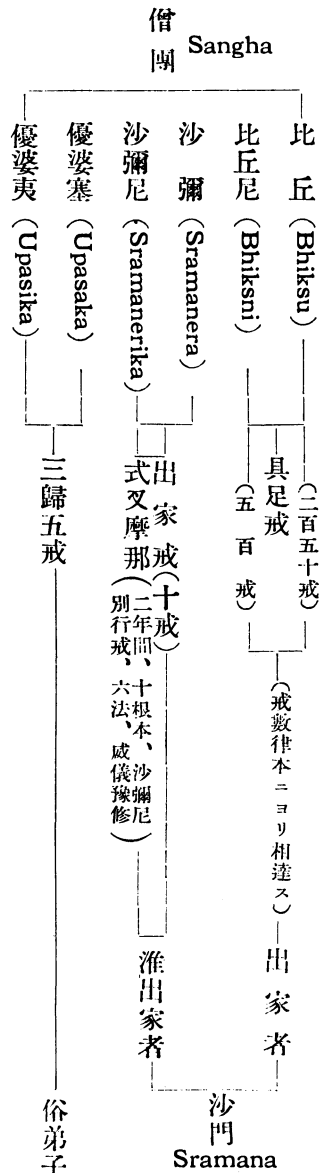
三、雜阿二十 (辰三、一四)

中阿一切智經 (昃七、八八)

長阿晝摩經 (昃九、六六)

三、僧伽の組織と理想の體現者

精神的王國たる僧伽は佛陀に依つて統一され(→)靜平にして歡喜に満ちてゐた、此の僧伽の内容組織を見るに中阿梵志品に「沙門瞿曇弟子或有在家、或有出家學道」(昃六、八〇)と述る如く僧團中には出家在家の弟子があつた、此の二衆の區別は勿論平等でなければならぬ筈であるが相當の色別があることは事實だ、彼の四姓差別の如き不公平な優劣ではないが教益の公平は缺かれて居た、(猶、不具者、病人、兵士、債務者、奴隸、不許可の子弟等は入團を拒絶された) 其の種類を擧げれば四衆五衆乃至八衆九衆とある。尤も古い形の僧伽は四衆であつた。四衆とは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷である、次に一般に通ずる七衆を示せば



先づ僧團を大別して出家と在家とし出家は沙門と稱して息心又は勤息などと譯する。總じて出家者の都名である。二十歳(受胎から計算)で別解脱戒の至極である具足戒 (Upasampada) を受けて修道に退轉なきものである。但し比丘尼は女性であるからとて監督も嚴重であり、持戒數も比丘より多い。比丘が四波羅夷(姪盜殺妄等の四棄)ならば比丘尼は八波羅夷、比丘が十三僧殘(波羅夷に次ぐ重罪)ならば比丘尼は二十七僧殘等に過重である。佛陀は女子を惡魔の足械とか女子の入團許可の爲に佛法五百年にして斷ゆる^(三)とか頗る悲觀的な言辞を漏らされてゐる点から考へれば比丘尼の入團は好感を持たれなかつたに相違ない、然し具足戒を受ければ比丘同様出家成就者である。次に沙彌は勤策男と譯し十五歳で入團して出家戒(Pabbajia)を受け十戒を持ち比丘に仕へて修業するのである。沙

彌尼はその女性で勤策女律儀を受けるが十八歳になれば正學律儀即ち式叉摩那(Suksamanavika)の律を行ふのである、之は有胎無胎を檢するため二年間其の戒を豫修するのである。尙此の外資格を得ても二十歳に達せぬ場合、又收容するに差支へない者で今迄他教團に居たものには各々四個月間の修行期がある、更に優婆塞は清信士、近事男などと譯し三寶に歸依し五戒を受けた俗弟子である、優婆夷は清信女、近事女と譯して同斷である、此の出家行者と在家信者は各自佛戒を嚴守し相互に法施(Dharmadana—出家)と財施(Amisadana)の布施を交換し^(五)教團を維持したのである。而して佛陀の理想を實現する修行に於ては在家よりも出家の方が適してゐると盛んに勸奨されてゐる。

一' A.N.VI. 135.

二' Mahavagga. I. 49. 61.

三' Cullavagga. X. I.

四' Mahavagga. I.38.

五' Iti vuttaka (本事經) 107.

四、出家主義と平等の歸趣

佛陀が其理想を實現するのに何故に出家を奨勵したのであらうか、中阿含象跡喻經第五に「在家至狹塵勞之處、出家學道發路曠大乃至我寧可捨於少財物及多財物、捨少親財及多親族、剃除鬚髮著袈裟衣、至信捨家無家學道乃至彼出家已捨親族愛比丘妻修習禁戒守護從解脫」(是六) 其他にも多く出家者の行位証果の便を述べてゐる、事實に於て在家者が入團しても家庭に社會に煩鎖な羈絆があるので修行も圓成し兼ねるのは當然である、一般的倫理道德を行ひ得ても解脱涅槃の實現は困難である、尤も俗信者でも比丘に近い修行をしたものであつたが之とて第四果は得てゐない、或は復、本事經(是六、三九)にある二衆証果の相違などから推して結局平等の教團にあつて在家信者は理想の實現に達し得ないことになる、故に佛陀の理想に従へば出家者ならざる限り眞實の意味に於ける人格平等は不可能である。長阿含沙門果經に「行法者彼於後時剃除髮服三法衣出家修道平等法」(是九、一七) と出家に於て始めて平等の法を得て平等の人格に達するのである。其出家者の立場から振返つて見た時僧伽ならざる衆生は悉く差別に呻吟する哀れむべき凡夫なのである。又僧伽にしても眞の出家を除く以外は煩惱未斷の者として遂に平等の法を俱有する事が出來ないのである。斯く論究すれば佛陀の平等思想は人間生活の癡棄を實現してこそ到達すべきものであることにならる。即ち徹底した出家主義の實行に平等の世界は展開するのである。古來印度の四姓差別も此處に至つ

て眞に解決したのであるが、解決出来ないのは平等を説く教團に入つた俗信者等である。無論此の差別は人種的の侮蔑的差別ではなく梵行漏盡の涅槃に至る修行的教階制度であるから不服や抗議はないが聖果に達し得ぬ不満足はあつたことと思ふ。それも佛在世は如來の大人格に抱擁されて何等思想の動搖や質疑もないにしろ、滅後は師主如來の追慕と諸佛出世の信仰と出家平等の偏照に慄らぬ思想は後世の菩薩思想や大乘一般の成佛思想等を誘起したのである、而して一般に通用する人格主義の平等に迄高潮され擴充された時即ち出家主義の普遍化された時こそ佛陀の眞面目は發輝され平等論も事實に於て達成されるのである。原始佛教では其處迄は論じてゐない。

佛陀滅度より千五百有餘歲遺耀東に及んで佛使日蓮大聖、法華經本門壽量の觀心事の一念三千の法門を開示されて衆生成佛の直道を體現せられた。我等一度本化の教化に従へば出家在家人、順緣逆縁の差別なく悉く同一法味を享受して等しく完全なる人格者となることが出来るのである。灌頂口傳鈔に「釋尊與我等三者本地一体不二身也、釋尊、法華經、我等三者全体不思議、一法全無三差別也」(一〇二九)の聖文誰か欣奉せざらんやである。佛陀世尊、日蓮大聖に値遇することは叶はずともかゝる平等大會の眞法を受持することのできることは感激に堪へぬものである、原始佛教々團の懸案であつた平等思想は日蓮聖人に依つて確實に解決されたのである。

- 一、 M.N. 38 Mahatanhasankhya 中阿三一 賴吒毘羅經、
- 二、 根本佛教三八四頁
- 三、 D.N. Mahaparinibbana P.22, P.51.
- 四、 長阿大本經（昃九、二） 增阿二十三（昃二、一四） 雜阿四十四（昃四、五五）